自己評価の規定要因と SELF-ESTEEM との関係

——個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係——

溝 上 慎 一¹

THE RELATIONSHIP BETWEEN REGULATING FACTORS OF SELF-EVALUATION AND SELF-ESTEEM

——Relationship between inner and outer frame as an idiographic approach——

Shinichi MIZOKAMI

Recently an idiographic approach into a nomothetic method has been the eyes of the world. Higgins, E.T. & Endo, Y. are quite famous for stressing the significance of this approach, though Higgins' approach is a little different from Endo's: the former is seen as an approach that a person represents idiographic points spontaneously while the latter is seen as an approach having a person select his own idiographic points in some items given by a researcher. The former is called "inner frame as an idiographic approach" and the latter is called "outer frame as an idiographic approach." The purpose of this study is to examine the relationship between inner frame and outer frame as the base of factors regulating self-esteem or self-evaluation. At the results, both high-self-esteem group and low-self-esteem group can select many regulating factors through outer frame and are also easy to represent them through inner frame. Furthermore, regulating factors in ambivalent self-evaluations are also examined, and the relationship between inner frame and outer frame is eventually better clarified.

Key words: nomothetic method, idiographic approach, inner frame, outer frame, self-esteem.

問題と目的

従来 Self-esteem の研究では、学業 (Bachman & O'Malley, 1977), 親子関係 (蘭・冷川・原田, 1980; 徳田, 1981; 石川, 1981), 教師評定 (Coopersmith, 1959), 学級内地位 (菅, 1975; 杉浦, 1976; 蘭・原田・冷川, 1980), 幸福感 (岡田, 1987), 性格特性 (藤土, 1985), 身体像 (竹内・早野・堀・向井, 1993) 等との関係が調べられてきた。これらの研究は因果論

として検討をおこなっているわけではないが、考え方としては Self-esteem に影響を及ぼす要因を捉えた研究として位置づけられる。また、重回帰分析により Self-esteem に関わりの深い自己認知の諸側面を検討した山本・松井・山城 (1982) の研究は、Self-esteem に影響を及ぼす自己認知の側面として、男子大学生では生き方と知性、女子大学生では優しさと容貌が最も寄与していることを見出している。

近年認知社会心理学の台頭により、法則定立的方法に個人の持つ重要な側面 (個性記述的観点) を考慮した方法論が注目されるようになってきた。その中でも現実自己と理想自己とのズレをみた Moretti & Higgins (1990) の研究は代表的である (遠藤, 1992a)。彼らによ

¹ 大阪大学人間科学研究科 (Graduate School of Human Science, Osaka University)

現所属: 京都大学高等教育教授システム開発センター (Center for Integrative Research on Didactic Systems in Higher Education, Kyoto University)

れば、従来のズレの研究は、調査者が用意した項目に対して理想自己と現実自己の評定を求め、両者の差異スコアを算出する点に特徴があったという。そして、従来差異スコアと Self-esteem との関係に一貫した負の相関がみられなかった理由として、調査項目において個人の重要な側面を考慮していなかった点（個性記述的観点の考慮）を挙げる。つまり、個人によって理想自己や現実自己の内容には個人差があり、もし調査者の用意した項目が被験者にとって重要な側面でなければ、そこでの差異スコアはたとえ大きくても Self-esteem には影響を及ぼすことはない。個人にとって重要な側面を考慮するためには、被験者自身に理想自己、現実自己を自発的に表出させ、その差異スコアを求めればいいことになる。Moretti & Higgins (1990) はこうした個性記述的観点を考慮した方法と従来の方法とをともに用い、Self-esteem との関係を調べた結果、従来の方法では Self-esteem との間に有意な相関が見出されなかったが、個性記述的観点を考慮した差異スコアではかなり強い負の相関がみられたと報告した。この報告は、Self-esteem に関わる自己認知の側面が個人によって異なることを、方法論的に示したものとして捉えられる。

またこの報告を受けて、遠藤 (1992a, 1992b) が同様の現実自己と理想自己とのズレの研究を本邦において再検討している。しかし、遠藤による個性記述的観点を考慮した方法は、Higgins の方法とは異なり、調査者が用意した重要と考えられる側面（ポジティブ領域、ネガティブ領域計 50 項目）を提示し、どの程度自分にとって重要であるかを、5 件法によって被験者に評定させている。そして、被験者の評定中、5 点をつけた項目のみをその個人が重要とする側面として検討をおこなっている。

上記の Higgins や遠藤の用いた方法は、法則定立的方法に個性記述的観点を考慮したという点で心理学研究における 1 つのパラダイム変換を促すものといえる。しかし、同じように個性記述的観点を考慮した方法ではあるが、Higgins は被験者自身にとっての重要な側面を被験者自身に直接表出させたのに対して、遠藤は様々な側面をあらかじめ調査者が用意し、重みづけさせることによって個人にとっての重要な側面を明らかにしようとしている点で相違がみられる。

法則定立的方法に個性記述的観点を考慮する方法は、すでに自己概念の研究においてもみられる。Who are you test (Bugental & Zelen, 1950) や 20 答法 (Kuhn & McPartland, 1954) は、個人自らが“あなた(わたし)はだれですか”といった問いに対する応答の中で、自ら

の重要な側面を表出する方法である。こうした個性記述的観点を考慮した自己概念の測定技法が、調査者の用意した項目に被験者が評定する形で自己概念を測定しようとした技法とは異なると強調したのは、筆者の知る限り McGuire だけではなかったかと思われる。McGuire ら (McGuire & Padawer-Singer, 1976 ; McGuire, McGuire, Child & Fujioka, 1978 ; McGuire & McGuire, 1980) は自由記述によって自ら表出された自己を“Spontaneous Self-Concept”と名づけ、それを“調査者が用意した側面に回答するものではなく、被験者自身が自ら重要だとする側面を選択する余地のあるもの”、“選択的に知覚されたものであり、現在の動機や価値、様々な自己の側面の中でも比較的強度なものと関わりを持つもの”と意味づけたのである。

このような測定の違いが生み出す自己概念の概念整理をはかるため、梶田 (1988) は“外在的視点・内在的視点”という概念を提唱した。梶田は、前者を“主体の外側からその主体の意識や行動を統一的に理解するために要請されるもの”、後者を“主体の実際の意識体験として現れるもの”と定義づけている。また溝上 (1995a) は、外在的視点に基づく方法は、調査者の用意した側面に回答する技法（評定法、Q 分類）と対応し、内在的視点による方法は 20 答法などのようにわずかな刺激語をもって自らの特徴を表出していく技法（Who are you test, 文章完成法）と対応していることを指摘している。この分類によると、Higgins の個性記述的観点を考慮した方法は、個人にとっての重要な側面を自ら表出させたという点で内在的視点に立った方法である。しかし、遠藤の個性記述的観点を考慮した方法は、個人にとっての重要な側面を考慮しているという点では従来の法則定立的方法とは異なるが、それでも個人にとっての重要な側面を調査者が用意した項目の中で選択（評定）させたという点で外在的視点に立った方法といえる。従って、個性記述的観点を考慮する方法は、必ずしも内在的視点に立つものとは言えず、内在的視点によるものと外在的視点によるものとがあることを指摘することができる（FIGURE 1 参照）。

以上の個性記述的観点（内在的視点・外在的視点）を念頭に置いて Self-esteem 研究を概観すると、従来の規定要因を明らかにしようとした研究はもとより、山本ほか (1982) の重回帰分析による研究も、個人にとっての重要な側面を考慮していないことがわかる。重回帰分析をはじめとした因果分析は、その因果（ベクトル）を、被験者自身が決定するのではなく、分析者ないし調査者が決定する。これは見方を変えれば、調査の対象と

FIGURE 1 Higgins, E.T.・遠藤由美による個性記述的観点の位置づけ

なった個人にその因果が意識されていなくとも、分析者あるいは調査者が因果を念頭におけば分析が可能となることを意味する。個人にとっての重要な側面を考慮するためには、その因果については個人に判断を委ねることが不可欠な要件となる。男子大学生にとって Self-esteem に影響を及ぼす自己の側面が、被験者の全体的な傾向としては生き方に置かれていても、ある個人にとっては毎日の順調な生活が基盤となっているかもしれないし、またある個人にとっては人間関係の良好さや生活感情(楽しさや充実感)に基盤があるかもしれない。個人にとっての重要な側面は、個人にしか判断することができない。

このような問題をふまえて、内在的視点に立って個性記述的観点を考慮する技法の1つとして、溝上(1994a)が開発した“WHY 答法”を挙げることができる。この技法は、複数の“それはなぜですか”という問いをパラレルに並べておき、個人がある問題を支えている、規定していると認知する側面(これを以下“規定要因”と呼ぶ)を自ら表出するものである。被験者によって表出された様々な規定要因は、外在的視点に立った規定要因を測定することにも利用することができる(溝上, 1995a)。しかしながら、WHY 答法を用いた内在的視点に立つ自己評価の規定要因(溝上, 1994b)と、それを利用して作成された外在的視点に立つ自己評価の規定要因(溝上, 1995b)が個別に検討されており²、両視点の意義は明確でない。両視点は同時に検討をおこなってはじめてその意義が明らかになるものである(溝上, 1995c)。

本研究では、自己評価の規定要因に関して、外在的視点・内在的視点に立った2つの個性記述的観点の違いを、Self-esteem との関係において同時に検討することを目的とする。研究1では外在的視点による検討をおこなう。研究2では、その結果をふまえて内在的視点による検討をおこなう。最後に、それらをまとめ

ることにより、外在的視点と内在的視点との関係が明らかになるとと思われる。

研究 1

目的

内在的視点による自己評価の規定要因を調べ、Self-esteem との関係を検討する。

方法

被験者 O大学, W大学の学生の主に1, 2回生202名(男子101名, 女子98名, 性別不明3名)³。

調査内容

①自己評価センテンス “私はいろいろ不満や反省がないわけではないが、基本的には今のままの自分でいいと思っています”という自己受容的な、また良い意味での自己満足的な評価を広く内包させた刺激文(以下“自己評価センテンス”)を与え、“はい/そう思います(以下“はい”)” “いいえ/そう思いません(以下“いいえ”)”の強制二択法で回答を求めた。

②規定要因項目 溝上(1995b)が作成した自己評価の規定要因項目を用い、「①における“はい/そう思います”(“いいえ/そう思いません”)について、なぜあなたは“はい/そう思います”と答えたのでしょうか(あるいは“いいえ/そう思いません”と答えたのでしょうか)。下の文を読んで最もあてはまる番号に○をつけて下さい」という指示を与えた。評定は“全くそのとおりだ”“どちらかといえばそうだ”“なんともいえない”“少し違う”“全くまとはずれだ”の5件法でおこなった。“はい”と答えた者(Yes群)にはYes群用の項目56項目(例えば『それは毎日が楽しいからです』『それは将来の夢や目標を持っているからです』『それは、学校生活がうまくいっているからです』『それは、不満などあって当たり前だと思っているからです』『それは、わたしが今まで生きてきた人生に満足しているからです』等)を、“いいえ”と答えた者(No群)にはNo群用

² 溝上(1994b, 1995b)の両研究は、自己受容の研究と題されているが、これはWHY 答法の刺激文「私はいろいろ不満や反省がないわけではないが、基本的には今のままの自分以ていいと思っています」をもって自己受容としている。しかしながら、この刺激文1つが、自己受容の概念を指しているとは考え難く、ここでは自己評価と称する。また本研究がSelf-esteemを中心に論をすすめているのに対し、ここで敢えて自己評価という用語を用いて区別しているのは、WHY 答法を用いるのに必要な刺激文(上記)が、Self-esteem と必ずしも同義ではなく、“自己に対する広い意味での評価”を意味するという理由からである。それ故に、規定要因という場合には、“自己評価の規定要因”を意味する。

³ データは溝上(1995b)と同じ被験者である。

の項目71項目（例えば『それは、自分のなかでなoshたいところがあるからです』『それは、将来やりたいことがまだわからないからです』『それは、自分というものがよくわからないからです』『それは、私の容姿(顔など)が気に入らないからです』『それは、自分の性格が悪いからです』等）を与えた。各規定要因項目は“それは～だからです”という形の記述で統一されている⁴。

③ **Self-esteem 尺度** Self-esteem 研究で広く用いられている Rosenberg (1965) の Self-esteem 尺度 (星野訳, 1970) を用いた。この尺度は10項目から構成されており, “非常にあてはまる”から“全くあてはまらない”の4件法で回答される。Rosenberg にない, 尺度中の逆転項目は反転させて合成得点を産出した(以下 SE)。

調査時期 1995年2月と8月

結果と考察

各規定要因項目に対して“全くそのとおりだ”と評定した項目を個人にとっての重要な側面としてその数をカウントした。その結果, 選択された規定要因項目の個数は, Yes 群では平均値10.30 (S.D.1.02), 中央値6.00, No 群では平均値10.49(S.D.1.00), 中央値8.00であった。重要項目の平均値はともに10個程度であり, 外在的規定要因として提示した全項目 (Yes 群 56 項目 / No 群 71 項目) の15~20%の選択率であった。

次に SE との関係を見るため, 10~40点のレンジを持つ SE 得点を高群 (31~40 点, 70%点以上), 中群 (26~30 点), 低群 (10~25 点, 50%点以下) に分割した (以下, SE の高低はこれに従うものとする)。それをもとに規定要因の選択個数と SE との関係を見ると (Yes 群は FIGURE 2, No 群は FIGURE 3), Yes 群では SE 高群が SE 低群に比べ規定要因の選択個数が多く, No 群では Yes 群ほど明瞭ではないながらも, どちらかといえば SE 低群が SE 高群に比べて規定要因の選択個数が多い。

これらの結果は以下のことを示唆しているように思われる。Yes 群では, SE 高群が多くの規定要因に支えられて自己評価を高めているが, SE 低群は自己評価センテンスに“はい”と答えながらも, SE 高群ほど多くの規定要因に支えられていない。No 群では, Yes 群ほど明瞭ではないが, SE 低群が多くの規定要因を持ちながら自己を低く評価しているのに対し, SE 高群

は自己評価センテンスに“いいえ”と答えながらも, その規定要因を多くは選択できない。

以上の結果から明らかにされた外在的視点による傾向をもとに, 内在的視点による自己評価の規定要因と

	選 択 個 数 (個)										
	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55
SE 得点	40						2	1	1		
	38				1	1	1				1
	36		2	2		1	1				1
	34		3		3	2					
	32	2	6		3		1				
	30	13	1	5	2						
	28	15	6	1	1						
	26	11	3	1	4		1				
	24	5	1	1							
	22	2									
	20	2	2	2							

(注1) 「選択個数」で“5”の場合は“0個以上5個以下”“10”の場合は“6個以上10個以下”を指す

(注2) 「SE 得点」で“20”の場合は“19-20点”を指す

FIGURE 2 SE と自己評価規定要因の選択個数との関係 (Yes 群)

	選 択 個 数 (個)											
	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60
SE 得点	34	2	1	1	1							
	32	4			1							
	30	3	3	1								
	28	11	3	3	1	2						
	26	2	4	1	1	1				1		
	24	5	7	5		2	1					
	22	2	1	2	4		1			1		
	20			3	1			1				
	18	1			1							
	16					1						

(注1) 「選択個数」で“5”の場合は“0個以上5個以下”“10”の場合は“6個以上10個以下”を指す

(注2) 「SE 得点」で“16”の場合は“15-16点”を指す

FIGURE 3 SE と自己評価規定要因の選択個数との関係 (No 群)

⁴ 溝上 (1995b) では, 同様の調査を中・高・大学生に実施しているため, Yes 群75項目, No 群79項目となっているが, ここでは大学生のみを扱うので明らかに中・高校生特有の項目とみなされるものを省き, Yes 群56項目, No 群71項目となっている。なお項目は, 学校, 生活, 友人, 家族, 人間関係, 身体, 能力といった幅広い領域から集められている。

SE との関係について次のように予測することができ
る。第1に、Yes 群の SE 高群は SE 低群に比べて、よ
り多くの規定要因に支えられて自己評価を高めている
ことが示された。それ故に、内在的視点による方法で
は、SE 高群は SE 低群に比べて規定要因を表出しやす
いであろう(予測1)。第2に、Yes 群の SE 低群は、自
己評価センテンスには“はい”と答えながらも、外在
的視点による規定要因を多くは選択できなかった。規
定要因を選択することさえ難しいのであるから、それ
を自ら表出するという内在的視点による方法ではさら
に困難になり、その結果として一般的カテゴリには含
まれないような何かを表出することになるであろう
(予測2)。第3に、No 群の SE 低群は SE 高群に比べ
て、より多くの否定的な規定要因を持って自己評価を
低めていることが示された。それ故に、予測1同様に、
内在的視点による方法においても SE 低群は SE 高群
に比べて規定要因を表出しやすいであろう(予測3)。第
4に、No 群の SE 高群は、外在的視点による規定要因
を多くは選択できなかった。それが内在的視点による
方法では、規定要因を表出することがさらに困難にな
り、予測2と同様に一般的カテゴリには含まれないよ
うな何かを表出することになるであろう(予測4)。な
お、その何かについての検討はあわせておこなう。

研究 2

目 的

内在的視点による自己評価の規定要因を調べ、Self
-esteem との関係を、研究1の結果から導かれた4つ
の予測に基づいて検討する。

方 法

被験者 K大学、O大学の332名(男性149名、女性183
名)、1、2、3回生を中心としている⁵。

調査内容

①自己評価センテンス 研究1と同様。

②WHY 答法 ①で“はい”と答えた者はなぜ“はい”
と答えたのか、10個の“それはなぜですか(WHY
答法)”(溝上, 1994a)に“3個以上は最低書いて下さい”
という但し書きをつけて回答させた。“いいえ”の者も
同様である。

調査時期 1994年6月と1995年3月

結果と考察

カテゴリライズ WHY 答法によって表出された記述
内容に基づいて Yes 群と No 群の規定要因をカテゴ

ライズした。Yes 群、No 群のそれぞれに関して、次の
カテゴリ項目を設定した(以下カテゴリのわかりにくいもの
のみ代表的な例を挙げる)。Yes 群においては“人間関係”
や“生き方・人生”、“生活感情(楽しい、充実している)”“他
者評価(自分を認めてくれる人がいる)”“性格”“過去(今ま
でよく頑張ってきた)”“将来”“学校(学校生活に満足してい
る)”“欲求行動(やりたいことをやっている)”“家族(すば
らしい家族をもてて幸せだ)”“運の良さ”“身体(背が高い)”
“生活行動(やることはやっている、何事も一生懸命やっている、
前向きである)”“能力”“生活(今の生活に満足している)”“自
己評価(自信がある、自分が好きだ)”“認知的対処(自分を肯
定的に捉えようとしている)”“悩み不満のなさ”“健康(五
体満足だから)”“その他(言い訳、人生論)”，以上計20カテ
ゴリである。また No 群においては“人間関係(友だち
付き合いがうまくいかない)”“生き方”“欲求行動(やりたい
ことがみつからない)”“家族”“対人行動”(思っていることを
人に言えない、人に冷たくあたってしまう)”“生活行動(毎日
だらだらしている、やることをやらない、実行力がない)”“性格”
“将来(夢がない)”“生活”“学校(学校がおもしろくない、勉
強をしない)”“生活感情(無気力だ、毎日が楽しくない)”“身
体(顔が悪い、太っている)”“考え方(すぐ悲観的になる)”“過
去(今まで良いことがなかった、受験に失敗した)”“健康”“能
力(頭が悪い、運動音痴)”“否定的自己評価(自信がない、自
分が嫌いだ)”“可能性追求(現状に満足してはダメだ、もっ
と良い自分になれる可能性がある)”“その他(人生論)”，以上
19カテゴリである。“可能性追求”のカテゴリのみポジ
ティブ様相をうかがわせる。

なおカテゴリライズに際して、WHY 答法において3
個以上の回答を表出していない者については欠損値扱
いにした(その結果 Yes 群181名、No 群117名、計298名、34
名欠損値)。また、中には例えば5個表出しても、1つの
規定要因にしかカテゴリライズされない場合や、5個の
規定要因としてカテゴリライズされる場合もあった。カ
テゴリライズは、筆者を含む3人の心理学を専攻する者
によっておこなわれた。若干の練習も含めてカテゴリ
の内容を確認し、3人一致しないものは最後にまとめて
合議した。合議で納得されたものまで含めた3人の
一致率は、91.4%であった。

SEと規定要因との関係 SEと規定要因の表出率
の関係を TABLE 1(Yes 群)、TABLE 2(No 群)に示す。
但し全体での表出度数が5名未満の要因については検

⁵ データは(1994b)に70名ほど追加したものである。

⁶ “人間関係”は実際の交友関係での不和を意味し、“対人行動”
は他者に対しての自分の行動に問題があるということを意味
し、両者を区別して考えた。

討対象から除外した(具体的には、Yes 群で“運の良さ”“身体”“能力”、No 群で“過去”“健康”“能力”が該当した)。

まず Yes 群から検討してみる。TABLE 1 をみると、SE 高群は表出率の10%を越える規定要因が7カテゴリみられた(但し“その他”は除く、以下同様)。それに対し

TABLE 1 Self-esteem と規定要因の表出率の関係
(Yes 群) (%)

表出率%	S E 高群 N=73	S E 中群 N=79	S E 低群 N=29
80-90			そ の 他 89.6
70-80			
60-70	そ の 他 61.6	そ の 他 60.7	
50-60			
40-50			
30-40	自己評価 34.2		
20-30	生活感情 27.3	人間関係 25.3	自己評価 20.6
	人間関係 24.6	自己評価 22.7	
	生 活 21.9	生活感情 21.5	
10-20	他者評価 19.1	欲求行動 15.1	生活感情 13.7
	生活行動 13.6	生活行動 15.1	認知的対処 10.3
	欲求行動 10.9	学 校 12.6	
		他者評価 11.3	
		生 活 10.1	
0-10	将 来 8.2	認知的対処 8.8	人間関係 7.6
	欲求不満のなさ 8.2	生き方人生 7.5	生き方人生 7.6
	健 康 8.2	性 格 7.5	他者評価 6.8
	認知的対処 8.2	欲求不満のなさ 7.5	過 去 6.8
	生き方人生 6.8	健 康 7.5	生活行動 6.8
	過 去 6.8	家 族 5.0	健 康 6.8
	学 校 6.8	過 去 3.7	生 活 6.8
	家 族 5.4	将 来 3.7	性 格 3.4
	性 格 4.1		欲求行動 3.4
			家 族 3.4
			欲求不満のなさ 3.4
			将 来 0.0
			学 校 0.0

(注)「表出率%」で“10-20”の場合は“10%以上20%未満”を指すものとする。

TABLE 2 Self-esteem と規定要因の表出率の関係
(No 群) (%)

表出率%	S E 高群 N=20	S E 中群 N=39	S E 低群 N=58
50-60			生活行動 55.1
			否定的自己評価 50.0
40-50	可能性追求 40.0	生活行動 43.5	対人行動 41.3
30-40		可能性追求 30.7	
20-30	否定的自己評価 25.0	否定的自己評価 28.2	性 格 27.5
	生活行動 25.0		考 え 方 20.6
	対人行動 20.0		
10-20	人間関係 15.0	性 格 17.9	将 来 15.5
	将 来 15.0	学 校 15.3	生 活 12.0
	生 活 15.0	将 来 12.8	学 校 12.0
	そ の 他 15.0	考 え 方 12.8	そ の 他 12.0
		人間関係 10.2	欲求行動 10.3
			生活感情 10.3
0-10	生 き 方 5.0	生 き 方 7.6	人間関係 8.6
	欲求行動 5.0	対人行動 7.6	生 き 方 6.8
	性 格 5.0	生 活 7.6	身 体 5.1
	学 校 5.0	そ の 他 7.6	可能性追求 3.4
	考 え 方 5.0	欲求行動 5.1	
		身 体 5.1	
		生活感情 2.5	
	生活感情 0.0		
	身 体 0.0		

(注)「表出率%」で“10-20”の場合は“10%以上20%未満”を指すものとする。

て、SE 低群は3カテゴリである。この結果は、SE 高群が SE 低群に比べて、内在的視点による自己評価の規定要因を表出しやすいことを示している。外在的視点による研究1の結果からは、SE 高群が SE 低群に比べて、自己評価の規定要因を多く選択していることがわかっている。内在的視点による規定要因の表出のしやすさは、外在的視点での選択個数の多さが影響しているものと考えられ、予測1を支持する結果といえる。次に研究1の結果から、SE 低群は表出する規定要因が見あたらず、一般的カテゴリには含まれないような何かを記述せねばならない状況になるだろうとの予想

をたてたが、それを研究2では“その他”のカテゴリとして扱った。TABLE 1 から SE 低群の89.6%は“その他”を表出したが、SE 高群でも61.6%の者が“その他”を表出していた。この結果は、予測2が単純に支持されないことを示している。そこで、“その他”を表出するだけでなく、他の規定要因も表出しているかどうかを“その他+ α ”（ここでの α は“その他”以外の規定要因なら何でもよいとした）として組み合わせをつくり、高群と低群の相違を比較してみた。その結果、 α に“自己評価”“認知的対処”“健康”のいずれかでも入れた場合は、高群と低群に明確な違いがみられなかったのに対し、“自己評価”“認知的対処”“健康”を α の対象からすべて除外したときには、その違いは最も顕著であった（FIGURE 4）。それによると、SE 高群で“その他”を表出した者の71.1%はその他以外の規定要因（ α ）も表出しており、SE 低群の“その他”を表出した者で、“その他”以外の規定要因（ α ）を表出している者は26.9%であった。“自己評価”“認知的対処”“健康”は、自己評価を支える要因というより、内面的視点による方法であるが故に表出されやすい規定要因とも考えられる。そのように捉えるならば、SE 低群では主に“その他”が記述の中心となっており、予測2は支持される。TABLE 1 の結果を“自己評価”“認知的対処”“健康”を除いてみると、SE 低群で10%を越える規定要因は“生活感情”だけであるのに対し、SE 高群はそれでも6カテゴリの規定要因を表出している。この結果は、予測1を否定するものではない。しかし、この点については今後慎重に検討していかなければならない。

FIGURE 4 Yes 群の SE 各群における「その他」「その他+ α 」の表出の関係

次に No 群について試みる（TABLE 2）。Yes 群と同じ基準で表出率10%以上の規定要因をみると、SE 低群では11カテゴリの規定要因がみられる。しかし、SE 高群においても8カテゴリの規定要因がみられる。このことから予測3、4は支持されなかったといえる。内面的視点による No 群では、SE 高群・SE 低群に関係なく、規定要因は否定的様相をうかがわせていると指摘することができる。

規定要因の内容をみると、次の2つのことがいえる。第1に、Yes 群と違い“その他”があまり多くないことである。このことは、Yes 群よりも No 群で規定要因を考える方がイメージされやすいことを意味しており、日本人の自己卑下の傾向（北山・高木・松本, 1995）を反映しているものとも考えられる。第2に、SE 高群で最も表出率の高い“可能性追求”が、SE 低群ではほとんどみられないことである。“可能性追求”の規定要因は、No 群が表わした規定要因の中で唯一ポジティブなものである。これは、No 群で SE 高群の特徴であると言える。そこで、“否定的自己評価”と“可能性追求”との関係をみると（FIGURE 5）、SE 低群では“否定的自己評価+可能性追求”がほとんどみられない（3.4%）のに対し、SE 高群では80.0%の者が“否定的自己評価”と“可能性追求”をともに表出している。このことは、自己を否定的に捉えながらも可能性に向かって追求していくことを意味しているものと解釈することができる。従って、予測3、4は支持されなかったが、SE の高低にかかわらず、自己評価センテンスで“いいえ”と答えた者には否定的様相が程度の差はあ

FIGURE 5 No 群の SE 各群における「否定的自己評価」「否定的自己評価+可能性追求」の表出の関係

れうかがえるということ、そしてSE高群が自己評価センテンスで“いいえ”と答える背景には、自己を否定的に評価しながらもそれは可能性に向かって追求していくという肯定的な志向を包含していることが明らかにされた。

全体的考察

本研究の目的は、自己評価の規定要因とSelf-esteemとの関係を、特に最近注目されている個性記述的観点から考慮する方法によって検討するところにあった。ここでは個性記述的観点と呼ばれながらも異なる2つの視点、外在的視点と内在的視点の相違を中心に検討をおこなった。

本研究では、個性記述的観点を考慮して自己評価の規定要因をみていくためにWHY答法、あるいはWHY答法を利用して作成された規定要因項目を用いた。それらとともに、自己評価センテンスである一文の刺激文でまず自己評価を決定し、その規定要因を探っていくという点に特徴があった。Yes群のSE高群はSEの高い者が自己評価センテンスに対して“はい”と答え、No群のSE低群はSEの低い者が自己評価センテンスに対して“いいえ”と答えているのであり、この2群の自己評価の規定要因はそのままSelf-esteemの規定要因と言い換えることができる。前者をSelf-esteem高群、後者をSelf-esteem低群とする。

本研究の結果から、Self-esteem高群は多くの要因に支えられて自己を高めており、そのことは外在的視点による規定要因の選択個数の多さ、内在的視点による規定要因の表出のしやすさ、として表われた。一方、Self-esteem低群も同様の傾向を示した。Self-esteem低群も多くの要因をもって自己を低く評価しており、そのことは外在的視点による規定要因の選択個数の多さ、内在的視点による規定要因の表出のしやすさとして表われた。McGuire & Padawer-Singer (1976) が、内在的視点から表出されるものについて“選択的に知覚されたものであり、現在の動機や価値、様々な自己の側面の中でも比較的強度なものと関わりをもつ”と述べるように、外在的視点から規定された要因の中で、比較的意識されやすい規定要因が内在的視点によって表出されたものと考えられる。総じて、Self-esteemはその高低にかかわらず、外在的視点に立てば多くの規定要因に支えられており、内在的視点に立てば、外在的視点に立って選択された規定要因の中から意識度・関心度の強いものが表出されたと考えられる。

Yes群でSEの低い者とNo群でSEの高い者につ

いての、Self-esteemと規定要因との関係はどのように考えればいいのであろうか。溝上・尾崎(1996)で実証的に示されているように、自己に対する評価は、高い、低いと一直線上でその方向性が論じられるほど単純なものではない。自己評価の対象となる次元を社会次元と個人次元に分別するだけでも、“友人や社会からの他者評価をとまなわない高すぎる自己評価”(杉浦, 1976)や社会的に十分認められているはずの者が自己基準として厳しく自己を評価する“自己卑下的自己評価”(寺町, 1984)として、相矛盾した評価が同時に存在することを示すことができる。本研究は、このような次元を設定しておこなったものではないが、本研究で扱ったYes群のSE低群とNo群のSE高群も、相矛盾する評価が同時に存在する群であるといえる。Yes群のSE低群がYes群のSE高群と異なる点は、外在的視点から自己評価を規定する要因を選択するように求められても選択するものがないところにある。内在的視点から自ら自己評価の規定要因を表出するように求められると、表出することが困難であるが故に、一般的カテゴリには含まれないような何か(本研究では“その他”として扱った)を表出しなければならない事態に陥る。つまり、Yes群のSE低群は、規定要因に支えられていない自己評価群といえる。一方No群のSE高群は、外在的視点からは自己を否定する規定要因を選択することが難しかったが、内在的視点では様々な規定要因を表出していた。No群のSE低群と異なる点は、No群のSE高群が自己を否定的に評価しながらも、可能性に向かって追求していくという肯定的な志向を包含していることであった。この群が、内在的視点から規定要因を数多く表出しているのは、自己を卑下的にみる傾向が日本人にはあり(北山・高木・松本, 1995)、そのことが反映されているからではないかと考えられた。

引用文献

- 蘭 千壽・冷川昭子・原田純治 1980 Self-esteemの規定・機能要因の心理学的研究(I) 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 600—601.
- 蘭 千壽・原田純治・冷川昭子 1980 Self-esteemの規定・機能要因の心理学的研究(II) 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 602—603.
- Bachman, J.G., & O'Malley, P.M. 1977 Self-esteem in young men: A longitudinal analysis of the impact of educational and occupational attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 365—380.

- Bugental, J.F.T., & Zelen, S.L. 1950 Investigation into the self-concept : The W-A-Y(Who are you technique). *Journal of Personality*, **18**, 483—498.
- Coopersmith, S. 1959 A method for determining types of self-esteem. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 87—94.
- 遠藤由美 1992a 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, **40**, 157—163.
- 遠藤由美 1992b 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, **63**, 214—217.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(2) 児童心理, **24**, 1445—1477.
- 石川嘉津子 1981 Self-esteemと両親像 日本心理学会第45回大会発表論文集, 573.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- 北山 忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の帰因：日本的自己の文化心理学 心理学評論, **38**, 247—280.
- Kuhn, M.H., & McPartland, T.S. 1954 An empirical investigation of self-attitude. *American Sociological Review*, **19**, 68—76.
- McGuire, W.J., & McGuire, C.V. 1980 Salience of handedness in the spontaneous self-concept. *Perceptual and Motor Skills*, **50**, 3—7.
- McGuire, W.J., & McGuire, C.V., Child, P., & Fujioaka, T. 1978 Salience of ethnicity in the spontaneous self-concept as a function of one's ethnic distinctiveness in the social environment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 511—520.
- McGuire, W.J., & Padawer-Singer, A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 743—754.
- 溝上慎一 1994a Spontaneous Selfの理論的検討およびWHY答法の開発 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 203.
- 溝上慎一 1994b why答法による自己受容の基底因とその関連(1) 日本発達心理学会第6回大会発表論文集, 143.
- 溝上慎一 1995a WHY答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報, **4**, 61—72.
- 溝上慎一 1995b 中・高・大学生における自己受容の様相とその構造 日本青年心理学会第3回大会発表論文集, 31—32.
- 溝上慎一 1995c WHY答法による将来の生き方基底因 心理学研究, **66**, 367—372.
- 溝上慎一・尾崎仁美 1996 自己評価における次元の検討 I 日本心理学会第60回大会発表論文集, 53.
- Moretti, M.M., & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108—123.
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116—121.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- 菅佐和子 1975 Self-Esteemと対他者関係に関する一研究—青年期を対象として— 教育心理学研究, **23**, 224—229.
- 杉浦喜久代 1976 文章完成法による自己概念の分析 III—中学生の場合— 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 238—239.
- 竹内 聡・早野順一郎・堀 礼子・向井誠時・藤浪隆夫 1993 中学生の体重イメージ—マスメディアの影響— 心身医学, **33**, 691—695.
- 寺田裕子 1984 自己卑下の自己評価と接近的防衛 甲南女子大学大学院論文集, 心理学年報, **3**, 53—64.
- 藤土圭三 1985 自己受容性に関する研究(I) 香川大学教育学部研究報告, 第I部, **64**, 257—290.
- 徳田完二 1981 親子関係とSelf-esteem—高校生を対象として— 日本心理学会第45回大会発表論文集, 574.
- 山本真理子・松井 豊・山城由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64—68.

付 記

本研究をすすめるにあたって、大阪大学人間科学部 梶田毅一教授（現在京都大学）に懇切丁寧な御指導を賜りました。深く御礼申し上げます。

(1996.8.16 受稿, 11.16 受理)